

[成果情報名] カキ「早秋」へのわい性台木利用によるわい化と生理落果抑制効果

[要 約] 台木に「静カ台1号」および「静カ台2号」を利用することにより、カキ「早秋」では樹がわい化するとともに、生理落果の抑制効果が認められる。

[キーワード] 早秋、静カ台1号、静カ台2号、生理落果、わい化

[担当] 静岡農林技研・果樹研セ・果樹加工技術科

[連絡先] 電話 054-376-6155、電子メール kaju-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp

[区分] 果樹

[分類] 技術・普及

---

#### [背景・ねらい]

静岡県果樹研究センターでは、カキ栽培の省力化と早期成園化を目的に、わい性台木「静カ台1号」および「静カ台2号」を育成した。また、カキ「早秋」は普及が期待されている極早生の完全甘柿であるが、生理落果により収量が不安定であることが課題である。

そこで、「静カ台1号」および「静カ台2号」の利用による「早秋」のわい化と生理落果抑制効果について検証する。

#### [成果の内容・特徴]

- 1 「早秋」では、「静カ台1号」および「静カ台2号」台は、幹断面積がヤマガキ実生台と比較して小さく、「静カ台2号」台では、ヤマガキ実生台と比較して樹高、樹幅、樹冠占有面積、樹容積が小さく、わい化効果が認められる（表1）。
- 2 「早秋」の1早期落果は、「静カ台1号」および「静カ台2号」の利用により低く抑えることが可能である（表2）。
- 3 「早秋」の後期落果は、「静カ台2号」の利用により低く抑えることが期待できる（図1）。

#### [成果の活用面・留意点]

- 1 「静カ台1号」および「静カ台2号」は、2014年3月に種苗法による品種登録がされた。これらのわい性台木利用苗木は、許諾先のJA静岡経済連を通じ、2018年から静岡県内での流通を開始する。
- 2 わい性台「早秋」では、摘らい等の適切な着果管理を行わないと、着果過多による樹の衰弱を招くので注意する。

[具体的データ]

表 1 台木の違いが「早秋」の樹体生育に及ぼす影響

台木	幹断面積 <sup>z</sup> (cm <sup>2</sup> )	樹高 (cm)	樹幅 <sup>y</sup> (cm)	樹冠占有面積 <sup>x</sup> (m <sup>2</sup> )	樹容積 <sup>w</sup> (m <sup>3</sup> )
静カ台1号	29.4 (74) <sup>v</sup> b <sup>u</sup>	237.5 (85) a	217.1 (93) a	3.7 (84) a	7.6 (68) a
静カ台2号	12.2 (31) c	150.8 (54) b	135.4 (58) b	1.5 (35) b	2.1 (19) b
ヤマガキ実生	39.5 (100) a	279.0 (100) a	234.5 (100) a	4.4 (100) a	11.2 (100) a
分散分析 <sup>t</sup>	**	**	**	**	**

<sup>z</sup>  $\pi((\text{幹周}/\pi)/2)^2$

<sup>y</sup> (最大幅+最小幅)/2

<sup>x</sup>  $\pi((\text{最大幅}+\text{最小幅})/4)^2$

<sup>w</sup> (最大幅×最小幅×高さ)×0.7

<sup>v</sup> ヤマガキ実生を100とした場合の比率

<sup>u</sup> 同一符号間にはTukeyの多重検定(5%)で有意差なし

<sup>t</sup> \*\*は1%水準で有意差あり

表 2 台木の違いが「早秋」の早期落果に及ぼす影響

台 木	着蕾数(個/樹)		早期落果率(%) <sup>z</sup>	
	5/8	7/17	5/8	7/17
静カ台1号	256.0	81.8 b <sup>y</sup>		
静カ台2号	258.5	85.3 b		
ヤマガキ実生	261.0	95.7 a		
分散分析 <sup>x</sup>	n. s.	**		

<sup>z</sup> 5/8から7/17までの落果率

<sup>y</sup> 同一符号間にはTukeyの多重検定(5%)で有意差なし

<sup>x</sup> \*\*は1%水準で有意差あり、n. s. は5%水準で有意差なし

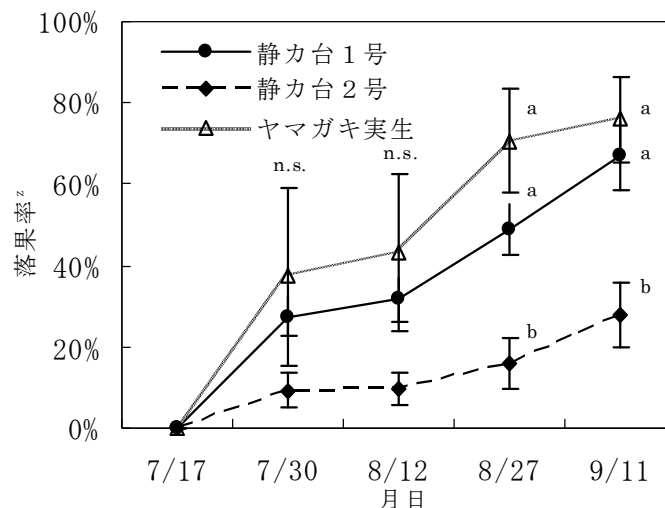


図 1 台木の違いがカキ「早秋」の後期落果に及ぼす影響

<sup>z</sup> 7/17から9/11までの間の落果率

角変換後、Tukeyの多重検定により同一符号間に5%水準で有意差なし

エラーバーは標準誤差を示す

[その他]

研究課題名：カキ、キウイフルーツ育成新品種の利用法の開発

予算区分：県単

研究期間：2015～2017年度

研究担当者：荒木勇二、服部憲明、佐々木俊之

発表論文等：服部ら (2016)：園芸学研究 15 別 1：89